

Title	小山清次著 支那労働者研究
Sub Title	
Author	田中, 萃一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.2 (1920. 2) ,p.298(156)- 299(157)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19200200-0156

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

支那労働者研究

小山清次氏著

新年勿々郷里より歸京せしに机上に小山君の『支那労働者研究』あり。蓋し『續支那研究叢書』第二卷として舊臘東亞實進社より公にせるものに係る。小山君が大正二年義塾理財科卒業後直ちに北清に渡り筆硯に従事する、傍支那事情を究め、殊に苦力生活に於ては何人の追隨をも許さざる活知識を有することは、世間自ら定評あり。かるが故に余は新年第一の好讀物として之を迎へ直ちに之を閱了したり。

本書は之を五編に分てるが第一編労働及生計第二編労働制度は實に全冊の一半を占め實に本

書の眼目たり。殊に労働者の團體苦力帮の組織機能等の説明に至りては本書を措きて他に容易に之を求む可からず。小山君が序文に於て『就中支那労働者の労働生計労働争議等に關する研究は大正二年八月より翌年四月に至る九箇月間著者自ら數十名の支那苦力より成る一種の帮を統率し一個の苦力頭として天津老車站構内の苦力小屋に起居し或は帮を代表し帮屬苦力の労働條件に付雇傭者側と折衝し或は労働上の協調又は争議に際し他帮の支那苦力頭と直接交渉の任に當り其の間實際に經驗せし所に係る』と云へるは決して自畫自賛の言にあらず苟くも支那に於て事業を試み若くば他日支那の労働者を我國工場に使用せんことを思ふものは先づ本書の前半を熟讀するの必要あり。

第三編は労働者の國內移動を説き第四編は國外移住を説けり。滿蒙の拓植政策は支那政府の

最も重きを置ける處にして第三編の記事は能くその事情を明にせり。労働者の國外に移住せるもの即ち僑工の研究は支那民族の勢力を知悉する上に於て必要缺く可からず。本書は南洋及後印度、北米合衆國、南米及西印度、英國植民地大洋洲諸島の數章に分て之に就て詳述せり。なほこの問題に就て研究せんことを思ふものはツアン・サンデック氏が一九〇九年に公にせる *China nezen buten China* の如き有益なる参考書を手にすることを得可し。但し支那労働者の國外出稼のうち於て殊に興味ある問題は労働軍の遠征にして小山君は本書の第五編大戦と支那労働者に於て詳細なる記述を之に與へ露國遠征の労働軍がボルシェー主義に感染して歸來せること迄叙述を進め支那國民性とボルシェー主義の關係を以て本書を了れり。尤も支那にては勞兵匪三者は常に有無相通するが故に附録として支那

の土匪に就てその一斑を説明せり。蓋し支那事情を説くに方りて本書の如く用意周到材料豊富にして記實正確なるものは他に容易に之を求め難かる可し。強て難を云はゞ目次繁瑣に互り學究的に過ぎたり、章の區別は必要なれど節の細分は餘りに忠實に研究勞作の跡を公表せりと云ふ可し。兎に角本書と云ひ既刊の『支那の政黨』と云ひ『續支那研究叢書』の編輯者が忠實なる研究者の手に之を託し得たるは眞に喜ぶ可し。

(田中萃一郎)

生田長江全譯 資本論(第一分冊)
カアル・マルクス著

綠葉社發行 四六版
本文二三三頁定價金二圓二十錢

左右を顧ることなくして極めて大膽なる論斷を下すを以て名ある田中(萃一郎)博士は「オーエン一流の舊社會主義は即ち一種の社會改善論にして何人も異論なしと雖も、マルクスの新社會